今井小だより

横浜市立今井小学校
令和４年１月31日
学校だより２月号

学校教育目標　：　か　が　や　い　て　い　る　子「自分大好き！今井大好き！」

春の訪れを感じて

学校長　森脇　信行

膨らみ始めたウメの蕾
（体育館前校庭）

早いもので、今年度も余すところ２か月となりました。２月は１年の中でも最も短い月なので、「逃げる月」とも呼ばれます。２月４日は、春の始まりとされる「立春」です。そしてその前日の２月３日が、冬と春を分ける「節分」となります。節分は、もともと立春、立夏、立秋、立冬の前日（年４回）を指していました。今では豆まきの風習が残っている２月の立春の前日だけを言うようになりました。また、立春は、はじめて春の気配が現れるという意味をもっています。旧暦では、このころが１年の始まりでもありました。まだまだ寒い日が続く時期ですが、学校の裏庭では、ふきのとうが地面から顔をだし、木々の芽は膨らんでいます。長い冬の後にやってくる春の穏やかな季節は確実に近づいてきています。

さて、学校生活の一年間を締めくくるこの時期ですが、２月の声を聞くと次の学年に向けての準備が大切になります。次に備えるためには今を知ることです。この一年間で、子どもは随分大きくなりました。外見はすぐわかりますが、見えにくい心の成長はどうでしょうか。それは、子どものさまざまな行動に現れています。友人関係はどう変化したでしょうか、読書傾向は、言葉遣いは、趣味やこだわりは、親への態度等々、子どもの何気ない様子をそのように見ることも次への備えといえます。「うちの子は幼いから・・」「ちゃんと分かっているから・・」などと思っていると、思わぬ変化に突然驚かされることがあるでしょう。よく、少年期の子どもには「手を離しても、目は離すな」と言われます。子どもと本気で向き合い、うるさがられても子どもの行動から目を離さないことが大切です。「携帯で連絡取りあっているから大丈夫」というものでは決してありません。また、「子どもを理解しようとする」ことはとても大切ですが、子どもに「親を理解させる」ことも同じように大切です。それが「しつけ」につながり、「駄目なことは駄目」という言葉が生きてくるのだと思います。植物たちは、種ができると子ども（種）を新天地へ放り出します。どのような環境に出会っても、強く生きて行ってほしいという願いが込められているように見えます。また、新天地へ放り出された子（種）も、その期待を担って親元を離れたように見えてしまいます。自然を観察していると、人の親の心構えとしての「子の成長への確信」「しつけの意味」に通じるものを感じさせられます。